印度學佛教學研究第三十七卷第一號　昭和六十三年十二月

『大日経』三三昧耶品所説の菩提心について

大塚伸夫

一般に、『大日経』の菩提心思想が問題にされる場合、その多くは「住心品」所説の菩提心に重点が置かれ、他の諸品における菩提心についてはあまり問題視されない傾向がある。そこで、本論稿では『大日経』の菩提心思想のもう一側面を明らかにするため、特に「三三昧耶品」に説示される菩提心を取り上げることにした。

まず、その前に「住心品」所説の菩提心がどのように明かされるか蔵訳を中心に見ると、

秘密主よ、次にまた秘密真言の門より菩薩行を行ずる菩薩にして百千万億無量劫の間、無量の福徳と智慧の資糧を積集した者達には……空性の自性にして実体のない、相のない、表象もない、一切の戯論より越えたる、虚空の如く無量にして、一切法の住処となりたる、有為と無為との界を離れたる、業と所作のない、眼耳鼻舌身意を離れたる極無自性心が生ずる。秘密主よ、これこそが初めの菩提心であると諸の勝者は説き給うのである。(1)

と説かれるこの一段では、真言行者に生ずる極無自性心が、「初めの菩提心」であると定義されている。その極無自性心なる菩提心の特徴は、中間部分の和訳を見れば理解されると思われるが、有為界と無為界という有無の差別を離れていることを始めとして、心のあらゆる相対的な認識作用が断じられた状態にあることがわかる。そのことは、「住心品」の比較的最初の部分に説かれる、自心が虚空・菩提と相関関係にあるとされる点にも同様に見い出せる。(2) このことよりすれば、「住心品」のいう菩提心とは、菩提そのものの心を本来意味するといってよいであろう。そこで、後述する「三三昧耶品」の菩提心と比較する上で、この菩提心を空性を本性とする菩提心と性格付けることにする。

また注意したいのは、このような極無自性なる菩提心の状態に行者が入った場合のことである。つまり、それまで持続してきた衆生に対する行者の悲の想念が、その刹那においても持続されるであろうかという疑問である。恐らく、このような心の状態に入った行者にとっては一時的ではあろうが、

衆生に対する悲の想念が中断する現象が起こると思われる。それは先にもふれたことであるが、この極無自性心という菩提心があらゆる相対的な認識作用を有していない心であるという理由による。唯一、心の認識作用があるとしたら、その作用が転換された空性に対する智慧の知覚作用としてあるだけだろうと思われる。[3]

実は、次に言いたいことは、このような心の特徴をもつと考えられる菩提心が経においては、特に蔵訳においてであるが、「初めの」という言葉をもって限定されている点である。普通、このように「初めの」と限定されれば、何か次に生じてくる菩提心を想像することが可能と思われる。結論的には、この次に生じてくると思われる菩提心が、「三三昧耶品」所説の菩提心に相当するのではないかと考えているわけであるが、漢訳においては、この蔵訳の「初めの菩提心」に当る箇所が、「初心」[4]と訳されるに過ぎず、実際にその微妙な意味はあまりよく汲み取れないが、蔵訳の記述によれば、十分に初めの菩提心といわれる、空性の理念を有する菩提心の次に、何か別の意味をもった菩提心が生じてくるであろうことを予想させてくれる。

そこで、次の「百字成就持誦品」の経文を見れば、この心の直後に行者の自心がどのように変化するかが知られる。

本初より少しも生ずることも、滅することもない時、瑜伽行者達の空智が如何にして生ずるのか。（即ち、）法が知られるべきであって、自性が不可得である時、菩提が生ずる虚空に等しい心が出生するであろう。その時、一切世間に随順する悲等もまた生ずるであろう。[5]

この「菩提が生ずる虚空に等しい心」とは、漢訳に「所謂菩提心」[6]とあることからも知られるように、先の「初めの菩提心」と同様の心の状態にあることが理解される。そして、その直後に一切世間に随順する悲の想念が生ずると明かされることからすると、ここに初めの段階ともいえる菩提心から悲が自然に生じてくる過程が明かされているといえる。要するに言いたいことは、「初めの菩提心」なる空性を本性とする菩提心から一切衆生に対する悲の想念が再び生ずるという、真言行者の心の流れを説明したかったわけである。このことは、これから見る「三三昧耶品」所説の菩提心と密接に関連して重要になってくる。

さて、いよいよ「三三昧耶品」における菩提心がどのように説かれているかを見ると、

世尊は彼（秘密主）に以下の如く仰せられた。法の相違より三種の法の差異が障礙なき理趣によって生ずるであろうそのものが三三昧耶である。その法の相違はまた何かといえば、法が知られるものが初心である。無妄想の自性と、その後に生ずる智慧と、それによって如実に遍知して、分別の網を悉く離れたる心が生ずる

ものが菩提の相である。（即ち）第二（心）は無分別にして正等覚の位である。秘密主よ、如実に見てまた衆生界を余す所なく観察し、悲力と変じて不可得性に、即ち一切の妄想を離れた無相菩提に諸の衆生を住せしめるべきであると想う菩提心が生ずるこれこそが三三昧耶である。(7)

とある。ここでは、密教において重要な三昧耶という概念が、真言行者の心品転昇の過程と関係付けられて説かれている。そのうち重要なのが第二の三昧耶に相当する行者の第二心である。この第二心の状態が菩提の相であり、無分別にして正等覚の位であると説かれることからすると、この第二心も先の「初めの菩提心」、つまり空性を本性とする菩提心に相当するかと考えられる。そして、行者の自心がこの後どのように変化するかを説くのが、第三の三昧耶に相当する行者の第三心である。これは、行者が正等覚を獲得したことから衆生界を余す所なく観察することによって、今、自分自身が獲得した無相菩提と同じ菩提に衆生を住させてやろうという悲の想念、つまり、三句のうちの大悲が生じてくることを明かしているといえる。またこの内容は、先の「百字成就持誦品」における一切世間に随順する悲の想念と同一の内容ともいえる。しかし、問題はこれで終わったわけではない。それは、この第三番目の三昧耶に相当する行者の自心（大悲）が、ここでは菩提心とされることにある。この「三三昧耶品」の菩提心を先の空性を本性とする「初めの菩提心」と比較すれば、衆生をその知覚対象に捉えて、悲の想念を有しているという点において、明らかにその心の状態が異なっているのが理解される。そこでこのように考えた筆者は、この「三三昧耶品」所説の菩提心を「住心品」所説の菩提心と区別して、大悲より生ずる空性と悲の相即する菩提心と性格付けることにした。

これ等の点から、『大日経』の菩提心思想は、以上の二種の菩提心が柱となって展開されていると主張したい。そのうち、「三三昧耶品」所説の菩提心の心相が本経のどこに観取できるかといえば、「具縁品」以下の曼荼羅行における阿闍梨の弟子に対する方便の心、つまり菩提心の本質であり、かつその形相でもある曼荼羅世界に弟子を導こうとする方便の心に見ることができる。(8) 本経の菩提心思想に関して問題はまだまだ残されているが、この菩提心こそがチャルヤータントラとしての『大日経』が本来意図する菩提心ではないかと現時点では考えている次第である。

※　註、及び口頭発表時に提示した『大日経』以後に成立したと思われる典籍における菩提心との比較は省略する。

〈キーワード〉　大日経三三昧耶品、菩提心、大悲

（大正大学綜合仏教研究所研究員）